

阿部安成 著

『大島ユリイカーハンセン病をめぐる国立療養所大島青松園の歴史表象』(滋賀大学経済学部研究叢書第52号)

滋賀大学経済学部
2019年、260pp.

柏木亨介

Kyosuke Kashiwagi

國學院大學 神道文化学部/助教

はじめに

阿部安成氏が前著¹⁾に続き、国立療養所大島青松園(高松市所在)の史跡等を紹介、解説した本書を著わした。内容自体は、すでに『彦根論叢』(416~418号、2018年)、『滋賀大学経済学部研究年報』(25巻、2018年)、『青松』(703号、2018年)に掲載されたものを加筆、再構成したものである。

評者が著者と初めて出会ったのは、2018年10月25日、大島青松園での調査を終えて乗船した同園発高松港行きの官有船のなかであり、このとき同園の歴史的建造物等について情報交換をしたことで知遇を得た²⁾。それ以前から彼のことは論文等を通して知っていたが、実際に会って話してみても、私の想像通り情報収集に対して強い拘りをもつ研究者であるとの印象を一層強くした。本書は彼のそうした学問的態度や関心に基づいて著わされたものであり、フィールドワークを介した史跡紹介の本のように見えて、実は史料と歴史記述をめぐる思弁の書である。

本書の主題は「大島ユリイカ」。ユリイカとはアルキメデスが金の純度を量る方法を発見したときに発した言葉に因んでいる。著者が用いるこの言葉の意味は、「わたし自身への、また、大島とそこに

あるハンセン病をめぐる療養所とそこを生きた人びとを知ろうとするものたちへの戒告の語」(260頁)なのだという。物事の発見(Eureka!)をめぐる既存研究の認識論に対するアンチテーゼを狙ったものであるらしい。

本稿では、まずは目次を紹介して本書の構成を把握した後、次に本書のねらいと内容について確認し、最後に評者の読後感を述べることにする。

1. 本書の構成

本書の目次構成は次の通りである。

序

I 生も死も

- 01 宗教地区
- 02 大島石仏八十八か所
- 03 大島神社
- 04 解剖台
- 05 協和会館
- 06 火葬場
- 07 納骨堂
- 08 風の舞

II 公共財や基盤整備や

- 01 盲導鈴

1)『島の野帖から—ハンセン病をめぐる療養所がある島でのフィールドワークから歴史を縁どる試み』(滋賀大学経済学部研究叢書第51号、2018年)

2) その内容の一端は本書241頁の註に記されている。

3) 社会交流会館とは、入所者と一般社会にいる人々との交

流の場を目的とした施設であるとともに、歴史展示等を通して療養所での生活実態と国のハンセン病対策による人権侵害の実態を伝え、ハンセン病をめぐる差別と偏見の解消を目指した人権啓発施設である。

4) 本書では具体的にどのような関係者なのか明記されていないが、おそらく同園入所者自治会であると思われる。

- 02 棧橋と船
- 03 井戸と貯水池
- 04 新旧大島会館と心月園
- 05 旧豚舎跡地
- 06 相愛の道と雲井寮—つつじ亭
- 07 歌碑
- 08 防空壕

跋

「序」と「跋」で本書執筆の背景と著者の考えが述べられており、本文は「Ⅰ 生も死も」と「Ⅱ 公共財や基盤整備や」の2章構成で大島青松園の史跡の解説が記されている。各章に小括はなく各項目の内容自体もそれぞれ独立、完結しているため、どこから読み始めても理解の妨げにならない。大島青松園の史跡について知りたい読者は、各自興味をもったところを読むとよいだろう。

各項目の配列には特に論理的前後関係は見当たらず、同園の史跡を総括した結論の章があるわけでもない。著者の意図を読み解きたい場合は、「序」と「跋」において研究背景と先行研究の問題点を確認し、各項目の解説文のなかで取り上げられた史料の性格と論理展開の分析を必要とする。目次構成を一瞥するに、おそらく著者としては後者のような読まれ方を期待しているのだろう。

2. 本書のねらい

著者は大島青松園社会交流会館³⁾の全面開館(2019年4月開館)に向けた展示準備に2017年度から2018年末まで携わり、その際に「屋外の史跡などについても案内や解説の展示をするよう提案し、それがうけいれられ」たため、16の史跡を選定のうえ案内・説明板を掲示したという。本書が16

の史跡の解説文からなっているのはこのような理由からである。

解説の案文は著者が作成し、関係者⁴⁾による検討を経て設置したという。つまり、史跡案内板は外部研究者(著者)と療養所「関係者」が協業して設置したものであり、本書はその作業過程で歴史叙述や文化表象の仕方について著者が思索した内容を読者に提示することがねらいであろうことは、本書の副題に「歴史表象」の語があることから推察される。ハンセン病療養所の歴史の語り手には入所者がいて、著者などの外部の者がいる。この二者の立場から生み出される歴史表象の問題を本書は問うている。

著者が展示準備に携わる以前、同園の屋外展示物は解剖台しかなく、これに外部の者(瀬戸内国際芸術祭)から「悲惨な歴史」の象徴という価値が付与され、今日まで語り継がれてきたという。展示=歴史表象をめぐる諸問題について何ら検討もなしに善悪二元論で療養所のモノが外部の者から一方的に展示され続けること(価値付けられること)に対して、著者は歴史表象の根源的な問いからの相対化を試みたのである⁵⁾。したがって、史跡選定数は16点であるが、この数自体に特段の意味があるのではなく、解剖台以外の新たなモノを選定して既存の価値観の相対化を図ったことが重要なのである。

さて、解説文作成にあたっては、療養所で編集発行した創立記念の史誌や、入所者⁶⁾が編集発行した逐次刊行物を参照している。著者はこれらをまとめるにあたり、書き方としては「年表の体裁で簡潔に記」すことを敢えてしなかった。その理由は、「療養者自身が記した、療養所の過去についての記述が、どういう層をなしているのか知りたかった

5) 著者はこれまでもハンセン病療養所の歴史表象をめぐる問題を提起してきた。本書で挙げている著者の論文以外にも、聞き書きの方法(エスノメソドロジー)の疑義について取り上げた論文も参照されたい(阿部安成著「だって、当事者がそう言うものですから—ハンセン病療養所における聞き取りの手立て—」『滋賀大学経済学部Working Paper Series

No.142』2010年12月など)。

6) 本書では「療養者」と記し、ハンセン病治癒後も療養所を必要とした人びとの意で用いている(003頁)。

し、それを書いておきたかったから」(003~004頁)というものである。療養者が記した歴史表象を著者が再編集するという歴史の主体をめぐる問題について、歴史記述を通して実践的に応えることが本書のねらいなのである。

3. 本書の内容

各項目の構成は、①項タイトル(史跡名称、ゴシック太字で表記)、②250字前後の史跡解説文(展示銘板の解説文、HG教科書体で表記)、③療養者側の史料にあらわれる史跡記述の紹介、へと続いている。

②史跡解説文は要所を端的に押さえているので、実際に同園で展示物を目の前にして読めばたいへんわかりやすいものとなっている。しかし、この「わかりやすさ」こそ本書の伏線であり、著者のねらいはそれとは対極に位置する。

本書の中心は③療養者側史料の記述であり、まさに博覧強記というべきか、縦横無尽に情報が交わり、史跡の歴史を多面的に明らかにしていく。療養者と一言で括ってもそれぞれに人格をもつ人たちであり、生まれた年代が違い、同じ史跡を見つめていてもそこには様々な認識や考え、評価が表われる。ここでは一つの体系だった論理(例えば「悲惨な歴史」)に基づいて歴史が語られるのではなく、各人がそれぞれの立場から多声的に語っている様(ポリフォニー)が広がっている。そして、各項目の記述分量も一定していない。したがって、著者も認めているように(259頁)、歴史表象をめぐる学問的問題について予備知識のない読者にとっては非常に読みづらい記述になっている。一方、本格的に史跡について情報収集したい読者にとっては、多声的であるがゆえに本書はこれ以上ない重要参考文献になることだろう。

4. 歴史表象の主体性をめぐる議論の必要性

—読後感にかえて—

結局のところ、本書からは同園の史跡の知識を得ることはできるが理解することは難しいとの感覚に襲われる。そのような場合、250字の解説文を読み返し、頭を整理してから再び内容を読み始める。史料は歴史の樹海に投げ出されて位置が定まらず、解説文は迷わないための定点として機能している。

本書は、外部研究者と関係者(あるいは調査者と被調査者)との相互関係のなかから新たな知が創出されていくプロセスが記されている。パブリック・ヒストリーの議論を借りれば⁷⁾、ハンセン病史にせよ療養所史にせよ誰でも史料にアクセスし、悪意をもって改ざん、剽窃などの行為がなければ自由にその歴史を語ってもよいのだが、従来はハンセン病患者(患者、回復者、元患者、入所者、退所者など)が発信する歴史こそが真实性を帯びて世間に流布してきたし、実際に国賠訴訟では国側の歴史認識が退けられ、ハンセン病問題の啓発事業はハンセン病患者の歴史認識こそ伝えるべき内容であるとされ、その後の行政上の取り組みはこれを定説として進められている。こうした歴史表象の主体をめぐる政治性の議論は、著者あるいは評者の世代が置かれたアカデミズムの環境を振り返れば、今なおアクチュアルな研究テーマである。そうした点において、評者は著者の研究に対して親近感を覚えると同時に一抹の不安も覚える。というのは、本書はあくまで歴史学者阿部安成の研究書であり歴史認識の表出にすぎず、一般の読者(あるいは素朴実証主義的な読者)はハンセン病患者の歴史認識を知りたいからである。啓発事業用に設置された“資料館”の学芸員身分であった評者の立場⁸⁾から本書を読むと、そのような疑問が生じてきたのが率直な感想である。もちろん、この疑問は

7) これについては菅豊、北條勝貴編『パブリック・ヒストリー入門』(2019年、勉誠出版)などが参考になる。

8) 評者の前職は重監房資料館学芸員。重監房とは国立療養所栗生楽泉園(群馬県草津町所在)に1938年から1947年

まで存在したハンセン病患者の懲罰施設であり、重大な人権問題としてその負の歴史を伝えるために2015年に重監房資料館が開館した。

本書の学術的価値を否定するものではなく、著者の歴史表象を通して惹起された評者の知的好奇心の表明である。

最後に、大島青松園を訪問したことのない読者は、本書の内容にとまどったことだろう。なぜなら、図版や表の1点もない本書は史跡の位置や形状が伝わりにくい。著者にとってみれば歴史とは文字で伝えていくことが標準になっているのであろう。もし評者が書くならば、図を多用して視覚的に読者に伝える努力をしたと思う。これも各人の歴史への認識と表象の仕方に違いがあるということでもあろうか。